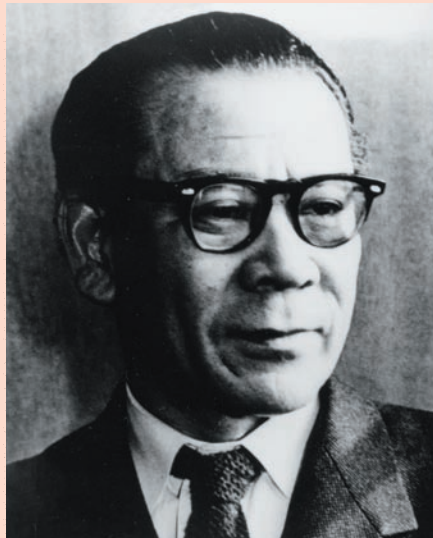


山崎青鐘

宇部市
(1908～1974)



【著作】

句集『風見鶏』（昭36・出版社不明）
『現代俳句の周辺』（昭38・其桃発行所）
句集『無辺』（昭43・俳句評論社）ほか

著作



（文・奥野保正）

実名は清勝、職業は歯科医。山口県宇部市に生まれる。昭和六年（一九三一）に大阪歯科大学専門学校を卒業し、約三年後に、宇部の花柳街ともいえる校町にて開業。近くに検番があり、粋な三味線や小唄等が聞こえる中で、炭坑景氣に湧く芸者さんや、踊りや小唄の師匠が、「先生、先生」と口をあめぐり開けて、若き歯科医の治療を受けていたということである。しかし、山崎にとって繁盛は本意ではなかった。

学生時代に俳句の『ホトトギス』同人となり、高浜虚子から将来を嘱望されると、逆に『ホトトギス』を飛び出し、『郁子』という俳誌を出し、また『山脈』という月刊俳誌を出した。

当時は、出版物の検閲等が厳しく、伝統とか權威というものを無視したり、全く新しい感性を危険視して危険人物というレッテルを貼り、拘禁するという時代で、山崎も山口の刑務所に同人数人が入っていた。（戦時中）

終戦後、開放されて、再び、宇部新川駅近くの古い平屋の一軒家を借りて歯科医院を開き、再び俳句への情熱を燃やし、治療のかたわら、俳誌『青鞥』を三十三号まで出した。昭和三十六年（一九六一）『風見鶏』を出版。その後『らんどる』を八号まで出している。山崎の俳句は前衛現代俳句の先駆ともいえるべき存在で、一見理解し難いが、イメージの拡がりや、語句衝撃によりて更に深みへと誘い出す魔力を持っている。

山崎には次のようなエピソードがあった。

虫歯治療に通っていた時、今日は抜歯するというので、舌下と上顎に綿花をつめ、麻酔注射をする段階で、急に「今日はやめとこう、それよりも今から飲みに行こうや」と夕暮れの街に出かけた。上顎の綿はつまつたまま、いつもの店に入って、「今日は全身麻酔といこう」と水割など注文。大分全身麻酔が効いた頃、筆者がトイレに立ち、酔ったまま壁にぶつかりそうになつて立ち止まった途端、「なぜ立ち止まる。惜しいことをしたのう。壁だとおもっているだろうが、あたつてみたらスリットと通り抜けたかもしれんぞ。最初から通れないと決めてかかるな。」

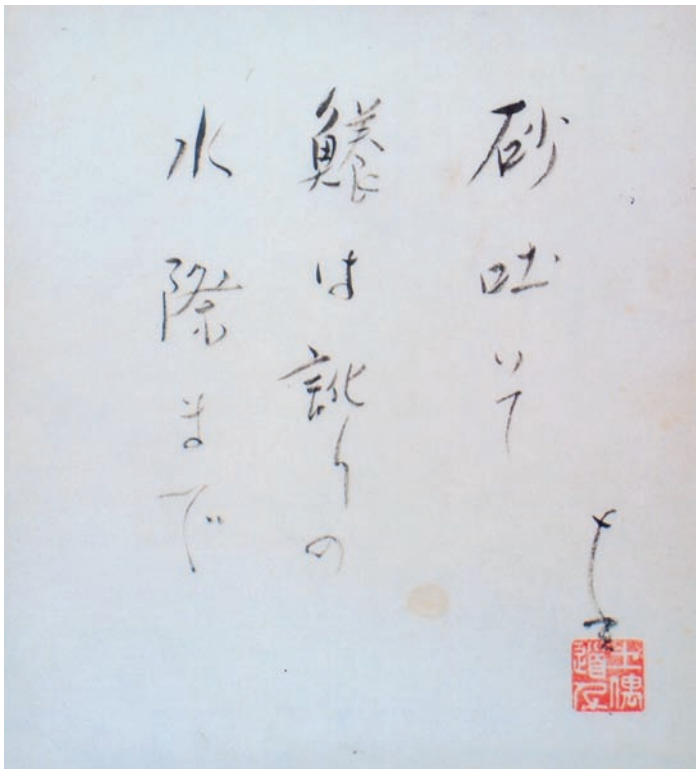
「世の中、壁だらけ、芸術活動は、その壁を一つずつ突き破っていくこと」と全身麻酔の二人ががなりながら歩いて帰ったことを今も思い出す。

山崎青鐘 年譜

（提供・奥野保正）

明治41（一九〇八）年	二二歳	1月16日、山口県宇部市に生まれる。
昭和6（一九三一）年	二二歳	大阪歯科大学専門学校卒業。
昭和13（一九三八）年	三〇歳	義恵26歳と結婚。
昭和31（一九五六）年	四八歳	戦時中、『山脈』の俳句が前衛的で、その感性が危険との事で青鐘と同人数名、山口刑務所に監禁される。
昭和36（一九六一）年	五三歳	戦後、森本覚丹等と文化活動に参加。
昭和38（一九六三）年	五五歳	11月1日、『青鞥俳句会』発足。以後、数度の挫折があったが、33号まで発刊。（昭和38年まで）
昭和39（一九六四）年	五六歳	10月、句集『風見鶏』を刊行。
昭和41（一九六六）年	五八歳	『現代俳句の周辺』（其桃発行所）
昭和43（一九六八）年	六〇歳	山口県芸術文化振興奨励賞を受賞。
昭和49（一九七四）年	六六歳	句集『らんどる』発刊。
		句集『無辺』（俳句評論社）を刊行。
		5月1日死去。

直筆色紙



砂吐いて 鱧は詛りの 水際まで

落書の裸婦がまぶしく枯れいそぐ

（『風見鶏』）

風見鶏失楽の詩を吃るかな

（『らんどる』）

砂吐いて 鱧は詛の水際まで

（『無辺』）

禁欲の冬日おどらす鼓笛隊

（『無辺』）

口うつしの毒薬蝸牛は透きゆけり

（『無辺』）